令和6年度 学校評価表(年度末)

愛南町立城辺中学校

【選択肢】 A:よくあてはまる B:あてはまる C:あまりあてはまらない D:まったくあてはまらない ?…判定できない				回答数		アンケート結果のうち肯定(A、B)の割合						
【評価基準:アンケート結果のうち肯定(A、B)の割合】 80%以上(A)、60%以上(B)、40%以上(C)、40%未満(D)				教職員11 生徒118 保護者90 地域住民44		アンケート結果(人数)						
重点目標	評価指標及び目標値	期間	評価	学校による考察<◇>及び改善策等<◆>			評価資料					
								A	B	C	D	?
確かな学力の定着と向上	指導方法の充実の改善・実	中間期	A	◇評価者のいずれも80%以上の肯定率であり、A評価とした。教員は分かる授業に努めており、それが生徒・保護者へも伝わっていることがうかがえる。一方で、授業が分かりにくい生徒があり、そのため保護者も否定的な回答となっていると思われる。 ◆継続して興味・関心を高める授業づくりとともに、振り返りや復習の充実により、基礎・基本の定着を図る。また、小テスト等により生徒の困り感を把握し、個別指導に生かす必要がある。ただ、昨年度よりも教員数が減ったため、担当教員の負担が増えていることを考慮しながら対応していく。	教職員	1	100%	3	9	0	0	
			生徒	1	93%	48	59	7	1			
		保護者	1	84%	11	65	12	2				
		年度末	A	◇評価者のいずれも目標値に達しているためA評価とした。しかしながら、前期の評価よりもポイントが下がっていることから、教員は分かる授業に努めているものの、それが生徒の理解に十分につながっていないことがうかがえる。個別指導等の時間確保は現実的に難しく、手詰まり感があるが、効率的で効果のある指導方法を研究していく必要がある。 ◆今後も継続して、興味・関心を高める授業づくりを実践することを通して意欲を高めるとともに、振り返りや復習の充実により、基礎・基本の定着を図る必要がある。	教職員	1	91%	2	8	1	0	
	生徒		1	93%	35	75	7	1				
	保護者	1	80%	9	63	17	1					
	ICTの活用	中間期	A	◇評価者のすべてで目標値を達成することができたためA評価とした。日々の授業に加え、端末を持ち帰り、家庭学習にも活用することが多くなった。そのため、授業の様々な場面で、学習ソフト(サイト)、思考ツール、アンケートを取り入れ、主体的・対話的で深い学びを実現する学習を行うことができた。 ◆教師・生徒は現在の取組を継続しつつ、更に効果的なICTの活用について研究を行う。	教職員	2	92%	6	5	1	0	
			生徒	2	89%	39	63	10	3			
		保護者	2	87%	10	68	11	1				
		年度末	A	◇評価者のすべてで目標値を達成することができたためA評価とした。中間期と同様、授業の様々な場面で、学習ソフト(サイト)、思考ツール、アンケートを取り入れ、学習を進めることができた。保護者の肯定率が低いのは家庭学習等で活用されている事例が少なく保護者の目に映る機会が少ないからではないかと考えられる。 ◆効果的なICTの活用について研究を行うとともに、家庭学習や宿題にICTを役立てるコンテンツを取り入れる。	教職員	2	91%	1	9	1	0	
	生徒		2	93%	40	70	8	0				
	保護者	2	80%	10	62	18	0					
基礎・基本の定着	中間期	B	◇教職員、生徒は目標値を達成しているが、保護者は6割を切っておりB評価とした。授業での発表やテストでは生徒が満足できる結果になっているが、保護者は学力の定着が不十分と感じているのではないかと考えられる。また、教職員の評価は高いことから、教師が対策をたてたつもり、理解させたつもり、の部分もあるのではないかと考えられる。 ◆学級や個々の生徒の様子に応じて、授業展開や発問の仕方、課題の出し方を工夫する。小テスト、個人用端末等を活用し、基礎・基本の学習内容の定着を確認し、授業等に生かす。	教職員	3.5	100%	8	16	0	0		
		生徒	3.4	81%	88	98	38	6				
	保護者	3	59%	10	43	30	7					
	年度末	B	◇教職員、生徒は目標値を達成しているが、保護者は中間期と同様に60%を切っているためB評価とした。生徒は授業での発表やテストで満足しているが、保護者はテストの点数からも学力の定着が不十分と感じているのではないかと考えられる。また、教職員の評価は高いが結果が伴っていないのは、指導方法に課題があるのではないかと考えられる。 ◆学級や個々の生徒の様子に応じて、授業展開や発問の仕方、異なった視点からの課題の出し方を考えていく。引き続き、小テスト、個人用端末等の活用等、基礎・基本の学習内容を定着させるためのあらゆる方法を実践する。	教職員	3.5	95%	4	17	1	0		
生徒		3.4	81%	89	103	42	2					
保護者	3	52%	7	40	34	9						
家庭学習の習慣化	中間期	C	◇評価者のいずれもが肯定率が60%に達していないことからC評価とした。昨年度中間期よりも教職員・生徒・保護者の三者とも下がり、特に保護者は27%低下した。教職員が課題の与え方、内容、量などを見直したことにより、家庭学習に掛かる時間が減少したとも考えられる。 ◆目標値を家庭学習時間で示していることから、家庭学習の意義や習慣化の可否を判断するような目標値に見直すことも必要であると考えられる。	教職員	4	42%	0	5	7	0		
		生徒	5	47%	15	39	40	21				
	保護者	4	37%	9	24	34	23					
	年度末	C	◇保護者は60%未満、教職員・生徒は40%未満であるが、宿題等をきちんとする生徒が増えてきたためC評価とした。特に教職員は大幅減となった。その理由として、ゲームやインターネットをする時間が増加していることが日頃のやりとりから伝わることで、課題への取組が不十分である生徒や、学習内容の定着が難しい生徒が増えていること等が考えられる。 ◆来年度に向けて、生徒の学力の定着と向上につながる評価指標と目標値を検討する。	教職員	4	9%	0	1	8	2		
生徒		5	44%	15	37	50	16					
保護者	4	36%	5	27	41	17						
学校運営協議会委員の所見(中間期)	【家庭学習の習慣化について】 ・以前から習慣化されていない課題である。数字ではなく質を大事にするのとよいのではないかと。 ・質問を「課題に毎日取り組んでいる」に変更してはどうか。保護者は子どもや学校に期待をしている分、評価が低くなる。頑張った評価を返すと良いのではないかと。 ・ICTの活用について、取り組みが家庭での学習に昇華できていないのではないかと。家庭での学びになっているとの認識が持てるよう、もっとうまく活用できるようにする。			学校の対応(中間期)	・家庭学習の習慣化については、短い時間で効率的に行っている生徒もいるものと思われる。そのため、これまでのように目標値に学習時間を設けるのではなく、家庭学習の質を問うような設問への変更を検討する。ただし、今年度は年度末との比較のため、変更は来年度より実施する。 ・ICTの活用については、授業において「デジタルとアナログのベストミックス」を目指して取り組んでいる。家庭学習においても、まずはベストミックスの充実を図りたい。							
学校運営協議会委員の所見(年度末)	・参観日等の授業参観を通して、生徒が真剣に学習に取り組む姿を見て感じている。教職員も指示を工夫したり授業改善を行ったりしている様子がうかがえ、良い雰囲気である。 ・「家庭学習の習慣化」の評価ダウンは非常に残念である。評価指標は、学習時間ではなく「家庭学習の習慣が身に付いている生徒を育てている」などへの見直しも検討してほしい。 ・長期休業中家庭学習の内容について、これまでのマンネリ化を変えるのはよいことだ。宿題の選択制や体験学習を家庭学習としてシフトしていくことも大切かもしれない。			学校の対応(年度末)	・現在の落ち着いた授業が継続できるよう、一斉授業、ペア、グループなど様々な学習形態やICTを活用しながら対話活動を進めていきたい。 ・長期休業での宿題の軽減において、大きな学力低下は見られなかった。今後も検討と改善を積み重ねながら、よりよい方法を模索していく。また、日々の課題の与え方等においては、ワーク等による復習は効果が見られるため、確実に取り組むことで学力の向上を図りたい。							